

六種の木

江戸時代に地方土産の一つとして全国に流通した「朽木盆」をはじめとする朽木のろくろ挽き物は、「六種の木」と呼ばれた木材によって作られていました。

トチノキ・ブナ・ケヤキ・カツラ・カエデ・ミズキなどの六種類の落葉広葉樹は乾燥が不十分だと狂いやすい材ですが、大径用材が豊富に調達でき加工が容易であったことからこれらの材が使われました。木地屋は「山七合目半から上は木

地屋のもの」などと標榜し、良材を求めて山中を漂泊しました。適材を採りつくすと次の山へ移動することが多いのですが、朽木は材が豊富であったことと、朽木藩の庇護を受けていたことにより木地屋が定着したようです。六種に制約されたのは朽木藩の林政制度に定められた範囲の木というのが真相だったようです。

全国の遺跡から出土した江戸時代の漆器椀の材を調査した結果によると、トチノキが約54%、ブナ約29%、ケヤ

キ約14%、カツラ約3%で、トチノキとブナの二種類で8割以上を占めています。

また、朽木のある農家に伝世した明治2年(1869)購入の箱書き紀年銘のある椀類の調査では、ブナが約7割、トチノキが約3割を占め、地域によって若干の差があるようです。

朽木生杉おひすぎには、県下でも有数の植生の豊かなブナの原生林があります。昨春秋には能家の山中で幹回り7メートルを超す西日本有数のトチノキが確認されました。これらの伐採は森全体の生態系を損ないかねず、琵琶湖の環境にも影響を及ぼす恐れがあるとして保全を求める活動が地元の方々や研究者などからなる「巨木と水源の郷をまもる会」によって進められています。

明治中頃に朽木の木地屋が絶えて以降、森はその植生を取り戻しつつある中、トチノキをはじめとする六種の木は「銘木」と呼ばれ、家具材や内装材として注目され、再び受難の時代をむかえています。

関文化財課

☎(057)4467



▲トチノキの巨木

編集者のつぶやき

いよいよ冬本番が近づき、今年ももうすぐ終わろうとしています。年々1年が早く感じるのは気のせいでしょうか…? 年末はいろいろと用事が重なり多忙な時期ですね。その用事の一つが大掃除。今回の特集では「ごみ減量大作戦」の取り組みや、紙ごみの分別について紹介しています。今年の大掃除は一工夫して、分別でごみを減らすように取り組んでみませんか。きっと資源に変わるものがあるはず。(広報担当S)